

◇東方 project 11次作品SS

星をうつした水面みなもから

(寅丸星／村紗水蜜)

／雲居一輪・雲山／封獣ぬえ)

作 : neneco

村紗水蜜は船の甲板に寝転んで、頭上に広がる岩肌を眺めていた。

地底に繋がれて数百年。変わることはない景色。

新都ができて、地底での生活もずいぶん華やかになった。ぬえなどは毎日のように新都で過ごしている。

でも、村紗は一日中こうして岩肌を眺めて過ごすことの方が多かった。

「船長は今日もここ？」

いつの間にか新都から戻ってきていた一輪が、村紗の横に腰をおろす。

「私は船妖怪ですから」

「だからつてずっと船にいらなくても良いのに」

一輪は土産の包みを村紗に渡した。中身は最近新都で流行っている饅頭。

「船長ももっと新都に行ってみたら？」

「んー……」

包みを開いて饅頭をくわえると、村紗はごろりとその場に寝転がった。

村紗も何度か新都には行ったことがある。とても賑やかで楽しい場所だった。

行けばきつと気分もまぎれるだろう。

でも、気分を切り替えるには、抱える想おもいがまだ大きい。

聖ひじりのこと。

船のこと。

地上のこと。

地上に残ったひとの、こと。

考えに沈む村紗を見て、一輪は苦笑しながら並んで横になった。

二人とも何もしゃべらない。

いつもなら、このままどちらともなく寝てしまい、いつの間にか目を覚ましてもう一人が起きるまで、ずっと静かな時が続く。

だが、この日は違った。

はじめに気づいたのは一輪。

「船長、ここ揺れてない？」

「え？」

急に振動が膨れあがった。

「地震？」

違う。一輪の言葉を、村紗は直感で否定した。地震にしては揺れが近い。

船が大きく揺れた。重い振動が身体の下から頭上へと通り抜ける。岩の隙間から熱風。続いて高温の蒸気が噴きだした。洞窟内の温度が急速に上昇する。

「雲山！」

「——っ！」

一輪に呼ばれて現れた雲山が蒸気の身体を膨らませて、溢れ出す高熱蒸気を吸い込んでいく。蒸し焼きになる前に、洞窟内の温度はゆっくりと下がっていった。

「いまのはなに!？」

「間欠泉だと思おう。地下深くで熱せられた温泉が地上に噴き出す現象で——」

「へえ、そんなものが、こんなところにあるなんてね。……船長?」

不意に黙り込んだ村紗を、一輪は不思議そうに眺める。

それまで気の抜けた様子だった村紗の顔に、生気が戻っていた。

「靈力接続! 船体チェック開始!」

村紗の声に応じて、朽ち果てた難破船のようだった船体に生命力が宿る。

「船長!？」

「手伝って、一輪!!」

「いいけど、何を!？」

「地上に出るの! 間欠泉が噴き出したんだから、きつと路みちができてる。それに、これはあんまり良くない話なんだけど、さっきの震動で洞窟の岩盤がんばんが緩くなってるの」

船体に靈力を繋げたことで、はっきりとわかる。始めの振動で大きく傾いた船体が、ゆっくりと土砂に沈みだしていた。

「このままだと生き埋め、ってことね。わかった、何をすればいい?」

村紗とともに操舵室そうたに向かって走りながら一輪が尋ねる。

「合図あいずするから、そうしたら雲山に船を押し出してもらって!」

「了解。ほかに?」

「ぬえの居場所はわからない?」

「あいつは……たぶん新都だと思うけど、すぐには見つけられないよ」

「そう……、あとで探しにくるしかない……かな」

たどり着いた操舵室に二人で駆け込む。雲山はすでに船尾で準備中だ。

「破損なし、回路よし、状態良好、動力伝達五秒前……！」

計器を確認しながら、村紗は手早く船出の準備を進めていく。

下からは再び振動が伝わってきた。二度目の間欠泉に近い。岩盤が崩落する前に出ることができなければ埋もれてしまう。

だが、そんな危険な状況にもかかわらず、数百年ぶりの船出に村紗の表情は生き生きとしていた。ずっとふさぎ込んでいた村紗のそんな様子を見ることができて、一輪の顔にも自然な笑みが浮かぶ。

「出港は手動じゃないとできないからね、うまくやってよ？」

「任せて！ 主動力接続確認、傾斜復元、船体起こせ！」

「雲山っ、船体起こせ！」

「——っ！」

ひととき大きな揺れ。その勢いを受けて、半ば土砂にうずもれていた船が全身を現し宙へと浮かびあがった。

「聖輦船、地上に向けて発進します！」

人里から少し離れた山すそに、すっかり荒れてしまった小さな寺がある。

その寺の軒先で、寅丸星は遠くの山肌を眺めていた。

いま寺にいるのは星ひとりだけ。訪れる人は誰もいない。

人間はとも移り気だ。目に見える奇跡でもなければ、すぐに離れて行ってしまふ。

いや、それは言い訳でしかない。今の荒れ様は、自身の修行不足、能力不足が招いた結果。

ならば、すぐにでも修行に戻るべきだろう。なにかに誘われるように出てきてしまったが、こんなところでのんびりしている暇はない。

踵を返して寅丸が奥に戻ろうとした時、地面が震えた。

「……地震？」

それにしても揺れが小さい。

振り返ってみると、先ほどまで見ていた山肌から白い煙が上がっていた。

「火事……いえ、蒸気でしょうか」

蒸気が噴き出している所は、博麗はくれいの巫女が管理している範囲にはいる。それなら大事にはならないだろう。

しかし、どうしても気になる。あの近くには古い友人達がいるはずだ。

意識を集中する。何か感じ取ることくらいはできるかもしれない。

再びの振動。白く煙る場所から水柱があがった。

「……間欠泉？」

幻想郷げんそうきょうの近くに火山などあっただろうか。そんなことを考えながらも、寅丸は

集中を解かない。目を離してはいけないような気がしていた。

まだ見えていない。

水柱が消える。

そのあとに浮かぶ光に包まれたものが何か、寅丸は知っていた。

「——船！」

考える前に身体が動く。

取るものも取り敢えず、寅丸は宙に浮かぶ船へと向かった。



船にたどり着いた寅丸は、ためらいを感じながら中へと入り、友人達の姿を探す。

友人といっても、もう何百年も会っていない。しかも、寅丸はひとりだけ地上に残った。良くは思われていないかもしれない。

しかし、それでも話くらいはしておきたかった。

「おや、珍しい顔」

そんな寅丸を見つけて声をかけたのは一輪。

「お久しぶりです」

寅丸の正面に立つ一輪は、行く手を遮っているように見える。

頭上から足下までなぞるように一輪の視線が動き、再び寅丸を正面から見据えた。

「地上の生活はどうだった？」

「それは……」

警戒しているようにしか見えない一輪の様子に、寅丸は答えに詰まる。

「地底は新都ができてね、なかなか楽しかった」

「こちらは……あまり、変わらず」

「そうね、変わってるように見えない」

言葉が途切れた。やはり、歓迎はされていないようだ。

一輪が動かないのなら、寅丸は引くしかない。

だが、寅丸はそれでも聞いておきたいことがあった。

「船長はどこにいるのでしょうか」

予測していたのだろう。すぐに答えがあった。

「船先への方に行くのをみたよ。誰とも会いたくなきそうだった」

誰ともではなく、「誰かと」なのかもしれない。そう思いながらも聞いてしま
う。

「会えませんか？」

「会ってどうするの？」

「……考えていません」

率直に答える。会えるだけでもいいと思っているが、会ってしまうとどうなる
かわからない。

ふっと、一輪の雰囲気が変わったような気がした。

「……貴方、少しくらい変わったら？」

「どういうことですか？」

「別に。まあ、会ってみるといいよ。会いたくないように見えたのは私の思い込
みで、本当は待っているのかもしれない。船長から直接聞いた訳じゃないから
ね」

そう言うと、一輪は船縁ふなべりに腰掛こしかけて道をあける。

「あ……ありがとうございます。その——」

「ここで話を続けるより、貴方は今すぐ駆けだすべきだと思うけどね、私は」
「そう、します」

一輪の言葉に頷いて、寅丸は言われたように駆けだした。

船先のさらに先端に、水蜜の姿はあった。船が向かう先の虚空をじっと見つめて背を向けている。寅丸が近づいても身動き一つしない。

寅丸に気づいてはいるはずだ。

そして、無視期待している。

そんな気がした。

何か言わなければならぬ。

だが、何を話せばいいのだろう。

ただひとり地上に残ったという事実がある限り、何をいっても言い訳にしかない気がした。

「その……すみませんでした」

だから、ほかの言い方を思いつかなかった。

「こんな言い方は、ふさわしくないと思いますが。でも私は——」

「そう思うなら言わなければいいじゃない」

水蜜が寅丸の言葉（おこえ）を遮る。

「どうして謝るの？」

「私はあるとき、皆と一緒にいることができませんでした。皆が封印ふういんされるとわかっていながら、傍観ぼうかんしていました。それは、貴女とほかの皆に許してもらわなければならぬことだと思えます」

「あれは——しかたがなかった」

水蜜が振り向く。だけど小柄な水蜜はうつむいたままで、背の高い寅丸には表情をうかがうことができない。

「私たちは聖のもとに向かうことを望み、地底に封じられた。あなたは聖の期待に応えることを望み、地上に残った。誰も悪くなんかなくない」

「水蜜がそう思ってくれているとしても、やはり私はあのとき皆を裏切つてし

まったのだと思います」

これからも水蜜達と共にいたいのなら、その償いつぐなをしなければならぬ。

だが、水蜜の口から出てきた言葉には、そんなことはまったく含まれていなかった。

「……星はまだ、私のことをそう呼ぶんだ」

「水蜜？」

「うん、そう。水蜜……って」

普段「ムラサ」としか名乗らないこの少女の名を知っているのは、親しい友人の中でも極めて少ないほんの一部。その一握りのひとたちですら、名前で呼ぶことは少ない。寅丸は意識していないが、「水蜜」という名で呼ぶのは、それだけ特別なこと。

水蜜が顔を上げる。

「ね、星はどうしたい？ 私たちにどうしてほしいの？」

静かな瞳が、寅丸をまっすぐに見つめていた。

「私は、罪滅ぼしをさせてほしいと思っています。そして、皆に許しを——」

「それって、大事なこと？」

水蜜は何を求めているのだろうか。寅丸にはわからなかった。ただ距離を縮めたくて、つい声が荒くなる。

「大事なことです！ そうしなければ、私は皆と一緒にいることができません！」

「一緒にいたいなら、言うことが違うよ」

一歩だけ、水蜜は寅丸に近づいた。

「私は星から、すまないとか悪かったとか、そんなことを聞きたいんじゃない。そんなこと言われても、どうすればいいのかわからないよ」

さらに一歩。

「私、自分の名前は『家族』にしか教えてないの。知ってる？」

「家族……？」

「うん。そしてこの船は、聖にもらった私たちの家」

手を伸ばせば届く距離。

「頭が硬くて気が利かないところは星らしいって思うけど、家族の間で償いとか

罪滅ぼしとかおかしいよ。そんなことより、星にはまず言わないといけないことがあるって思う。ずっと家にいなかっただんでしょう？」

手を伸ばさなくても届く距離。

寅丸が縮めなければいけなかつた距離を、水蜜のほうから縮めてくれた。だったら、ここで水蜜が求める答えを出さなければ、それこそこの場いることなどできやしない。

家に帰ったら、まず最初に言わなければならぬことは何だっただろうか。ずっと昔、寺で暮らすことを決めたときに、寅丸は聖から教わった。

「た……ただいま……」

不安そうな声。

「うんっ、おかえり、星……」

嬉しそうな声。

そして、水蜜が寅丸の腕の中に身体を預けようとしたとき、雰囲気をぶち壊す怒鳴り声が響いた。

「このばか、待てっ！ おい、二人とも避けろっ!!」

「え？」

「なっ!？」

あわてて飛び退いた二人の間に閃光せんこうが落ちる。

白く染まった寅丸の視界が元に戻ると、水蜜の腕を両腕で抱えた黒服黒髪くろくまのぬえが立っていた。

「やつほー星ちゃん、久しぶりー。元気してた？ もう、みっちゃんったら急に船ごといなくなるもんだから、びっくりしたよ。もしかして置いていかれたかかって思ったけど、間に合ったみたいでよかったー」

「その、それはっ、急いで脱出しないといけなかったから……っ」

「いいよいいよー、怒ってないから」

「そう言いながら、満面の笑みを浮かべたぬえは、奇妙な形をした赤い羽で水蜜の身体を逃げられないように抱き寄せる。

「ねえ、みっちゃん、せっかく久々に地上に出たんだから、ちよつと遊びに行ってみようよ。きつとおもしろいよ？ この船って自動操縦だから、いなくてもいいんでしょ？」

「え？ うん……」

「よっし、オツケーだね。じゃあ、早速行くよーっ！」

「え、えっ!? そ、そういう意味じゃなくて……っ!!」

慌てる水蜜を気にもせず抱えて、ぬえは船から飛び去ってしまう。

あつという間の出来事できごとで寅丸は動くこともできない。

「まったくあの娘こは……」

そこに、ため息を付きながら一輪がやってきた。

「それで……、貴方はいったい何をしているんだ？」

一輪があきれた視線を寅丸に向けてくる。

「何、と言われましたも……」

何もしていないというか、できなかったというか。

「まあ私としてはね、船長が幸せだっていうなら、どちらと一緒になつてもい

いって思う。でも、連れ去られながらずっと期待するように貴方を見ていた船長

の視線の意味に気が付かないようなら、私はぬえを応援するよ？」

「う、あ……っ！」

あつけにとられていた寅丸は、全く気づいていなかった。言われて思わず頭を抱えそうになる。

「ついでに言うと、ぬえのあれは冗談じょうだんじゃないよ。いたずら好きで天あまの邪鬼じやく、人のものを横取りしたがるあいつの性格を忘れてないよね？」

「あ、あの、一輪さんっ！」

今頃になって寅丸の中に危機感が沸き上がる。

「これから呼ぶとき、星とバカ寅どっちにする？」

「バカ寅でいいのであとをお願いしますっ!!」

寅丸は船縁を蹴って、ぬえが飛んでいった方向にむかう。霊力では勝まさる寅丸なら、今からでも追いつけるはず。

「了解。行ってらっしゃいな」

手をひらひらと振って、一輪は寅丸を見送る。

「まったく、あいつバカ寅がいるとにぎやかでいい」

全力で向かったのだろう。すぐに寅丸の姿は見えなくなった。

「さて……と」

ひと息ついて、一輪は甲板にあぐらをかいて座る。

「あ、そうだ雲山、倉に船長秘蔵の一本があるはずだから、この隙に開けちゃおうよ。きつと、そのくらいの報酬は受け取っていいはずだからね」

それを聞いて雲山はひとしきり笑うと、秘蔵の酒を取りに船倉せんそうへ向かった。

「あいつらが戻ってくるまで、ここから見える久々の地上を眺めながらのんびり飲むとしようか」

頭上に青く広がる空とまぶしく輝く太陽に目を細めながら、一輪はごろりとその場に横になったのだった。